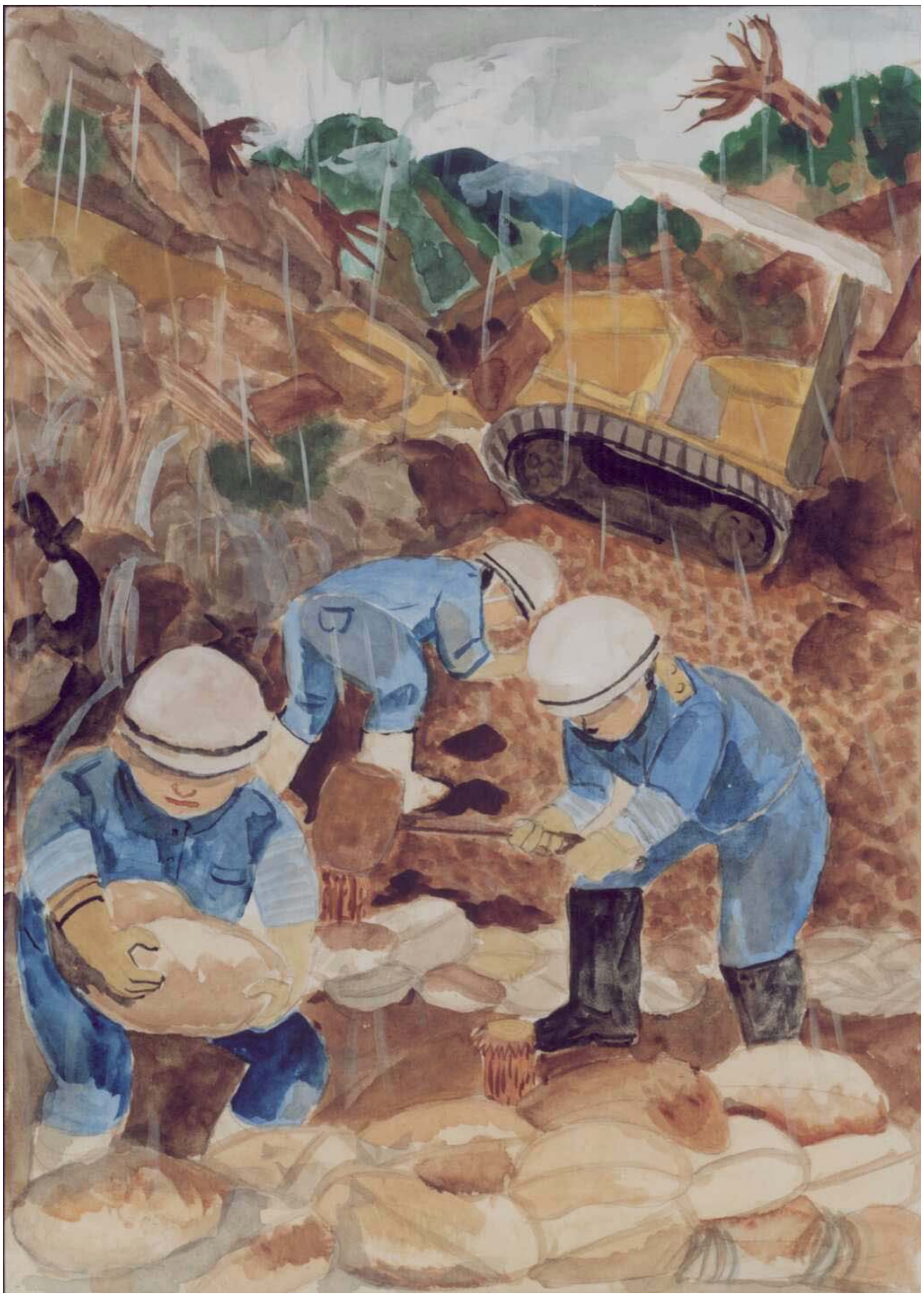
国 土 交 通 大 臣 賞
（絵 画・小 学 生 の 部）

岡山県　新見市立神郷北小学校　2年
大 原 慎 也

国 土 交 通 大 臣 賞
（絵 画・中 学 生 の 部）



愛知県　愛知教育大学附属名古屋中学校　3年

足 立 悠 輔

国 土 交 通 大 臣 賞
（ポスター・小学生の部）

宮城県　古川市立西古川小学校　4年
高 橋 奈 津 子

国 土 交 通 大 臣 賞
（ポスター・中学生の部）

宮城県　古川市立古川東中学校　1年
石　井　皓　子

国土交通大臣賞

（作文の部　小学生）

台風二十三号

六年　島田　瑠萌

昨年の十月二十日の台風二十三号での体験は本当に怖い出来事で、私にとって忘れる事の出来ないものになっています。

当時、私達家族は淡路島に住んでいました。山々に囲まれ、家のすぐそばには静かに流れる川がありました。鳥の声や虫の声が聞こえるのはいつもの事で、道にはカエルやカニ、カメ等が歩いていたり、時には庭を野うさぎが通る事もある様な、自然がいっぱいの所でした。

あの日は朝から大雨洪水けい報が出ていたので学校は休校になり、家族そろって家にいました。滝の様にものすごい勢いで雨が降り続いていたので両親は、

「いつもの台風とちがうね。」

「大丈夫かな…。」

と言いながら台所の小窓を開け、何度も外の

様子を見ていました。夕方になって、突然「ゴー」という今まで一度も聞いた事がない様な音が聞こえたので、母が急いで外を見ると、大木が大量のどろ水と一緒に流れて来たのが見えたそうです。

「ここにいるのは危険だから逃げよう。みんな準備して！。」

と母が言いました。私が見た時には川の流れは激しくなり、川のふちがどんどんけずられ、うらの畑までもが少しずつ流されていました。

（3）

私は胸がドキドキして、怖くてどうしたら良いのか分からなくなり、自然になみだが出て来ました。弟も妹も泣くばかりで、荷物をまとめる事など出来ませんでした。母は家族全員の着替えをすばやくバッグにつめ、すぐに家を出る準備をしていました。

「みんな早く！。公民館まで行くよ！。」

と父に言われ、急いで家を出ました。庭にはプールの様に水がたまり、どこが道なのか分からない様な状態になっていました。

（4）

やっとの思いで公民館にたどり着くと、そこにはたくさんの人がひなんして来ていました。うら山がくずれ土砂が家の中に入って来た人、池が決かいしそうで危険を感じてひなんして来た人、家の周りがくずれ家から出る事が出来ず、ヘリコプターで救助された人など、いろんな人がいらっしゃいました。どの人も同じ様に不安な気持ちでひなんして来ているのです。そんな中、パンや飲み物を配って下さる親切なおばさんがいらっしゃいました。私達にも何か出来る事があるはずだと考え、母と弟、妹と一緒に入りッパをそろえたり、雨もりがしている所をぞうきんでふいたりしました。そうする事で不安な気持ちもまぎれました。でも困った事もありました。断水で、お手洗いも洗面所も全く水が出なかったからです。また、ねる時も人が多いので場所がせまく、落ち着いてねむる事も出来ませんでした。

台風が通り過ぎた次の日の朝早く、私の家

の基礎部分のようへきが川に流され、家がかたむいているという事を聞きました。両親と一緒に見に行ってみると、家はもちろんの事、あんなにきれいだった山はいたる所でくずれ、川はばは今までの二倍ぐらい広くなり、橋は落ちてしまっていました。その様子を見た時、大切な宝物がなくなってしまったような、何とも言えない悲しい気持ちになりました。たった一日でこんな事になってしまうなんて。本当に残念ですが、もう家には住めなくなってしまいました。でも家族みんながけがもなく助かった事は、何よりも良かったと思います。

あの台風で、洪水で流され電柱につかまっている所を消防団の方に助けていただいたという方の話を聞きました。本当に怖かった事でしょう。また、土砂くずれで生きうめになり亡くなられた方もいらっしゃいます。どんなに苦しかった事でしょう。私達よりもっともっと大変な思いをされた方がたくさんいら

愛徳学園小学校用箋　20×20

っしゃるのです。自然災害は本当に怖いです。
私は、助かったこの命を大切に生きなければ
いけないと強く思っています。

砂防発祥の地、六甲を訪ねて

三木学園白陵中学校
（みきがくえんはくりょうちゅうがっこう）
3年生　北口千裕（きたぐち　ちひろ）

建物の壁には私の胸よりも高い所に黒い筋が残っている。水がそこまできたことを示すものだ。わらくずや泥などを身にまとっている木々が並んでいる。そんな光景を見ているだけで、水の恐ろしさが伝わってくる。そして、つい先日まではにぎやかであったろう鶏舎は、今はひっそりとして、そこからは何も聞こえてこない。

昨年、台風二十三号の災害復旧ボランティアとして豊岡を訪れた時に見た光景である。

ボランティアに行った帰り道で、谷崎潤一郎の小説「細雪」を思い出した。作品には、地元阪神間で起きた大水害の様子が、生々しい表現で描かれていた。初めて読んだ時には、あまり実感がわかなかったが、今は小説の中で谷崎が「川ではなく海」とまで表現した気

持ちが分かるような気がする。阪神大水害を作品の中で扱ったのは、谷崎だけではない。手塚治虫も「アドルフに告ぐ」の中で土石流の様子をリアルに描いている。当時の二大巨匠が自己の作品の中で、阪神大水害にこれほどにもこだわったのは、それほど衝撃的な出来事だったからであろう。

私が知っている六甲山は、毎日眺めて四季の移り変わりを感じ、レジャーで訪れて自然を満喫する身近な山である。六甲を源流とする住吉川や芦屋川の川辺は、憩いを求めて散策するのに最高の場所である。そんな落ち着いた生活が守られているのは、阪神大水害以降の、砂防に取り組む人々の多大な努力によるものである。再び惨事を繰り返すまいと、多くの人々が知恵と努力を注いできた。そんな人々の知恵と取り組みを知りたいと思い、六甲山の砂防の歴史を調べてみた。

まだ薪を燃料にしていた時代に、六甲山の木が次々と切り倒され、山肌がむき出しにな

っている写真を見つけて驚いた。もろい花崗岩が隆起してできた六甲山は、山の保水力が弱ることで、急傾斜の川を流れる雨水のために浸食され、流れ出た土砂が川底に堆積して天井川ができたことを知った。阪神間を流れる川は、住吉川も、芦屋川も、夙川も、武庫川も全て天井川である。JRが住吉川や芦屋川の川底をトンネルで通過するのも、天井川の高さのためだろうと思う。

そのような六甲山と共存するために、人々は古くから知恵をひねり、努力を重ねてきた。上流にあたる六甲山に植林をし、河川の改修工事を施し、場合によっては湊川のように水路の付け替えまでも行ってきたのである。故に、六甲山は砂防発祥の地と呼ばれ、古くから砂防への取り組みが盛んに行われてきた。その取り組みは、けっして山や川を厄介視するのではない。六甲山麓に住む人々は、自然を貴重な財産であるととらえ、自然と共に生き、自然を守っていく姿勢を貫いてきた。

私は砂防の現場を実際に確かめてみるために、太多田川の上流を歩いてみた。その浸食の激しい様子から、韓国の名勝に例えて蓬莱峡といわれる場所である。前日の雨の影響もあって、道路から川の方に立ち入ったとたんに足首まで土に埋まる。砂防堰堤に上がろうとすると足がすべる。花崗岩が風化し、浸食されて真砂土となって一面に広がっている。この土砂が大雨で一気に下流に流されたらどうなるだろうかと考えてしまう。

砂防堰堤に上がってみると、その上はちょっとしたグランドのような場所であった。以前は、ダムのようになっていたのだろうが、今は土砂で満杯になっている。重機を使ったとしてもこのように運びきれるのだろうかと思う程の土砂の量である。それを動かす自然の大きな力と、それを乗り越えて自然と共存しようとする人間の知恵がぶつかり合う現場がここ蓬莱峡であった。

すでに土砂で埋まった砂防堰堤はもうそれ

で役目が終わり、お役ご免になってしまうのだろうか。私はそんな疑問がわいた。そこで、次のような実験をしてみた。同じ傾斜の面を二つ作った。一つは斜面を直線に、もう一つは斜面を階段状にして、同時にビー玉を転がしてみた。すると階段状にした斜面は、直線のままの時よりはるかにゆっくりとビー玉が転がっていく。この理屈は水でも同じであろう。砂防堰堤は、今もいっぱいの土砂を懐に抱きながら、私たちの暮らしを見守ってくれる。山が抱えきれなくなった水を優しく私たちの元へと流してくれる。

普段の私たちは当たり前のように水と親しみ、山の緑を愛で、町を眺めている。しかし、その水・山・町を守ってきたのは、砂防という人と自然が共生する仕組みを考えてきた人々の知恵である。六甲の砂防の歴史を知ることで、その山麓に住むことの素晴らしさを再確認できたように思う。